

強度行動障害の理解

- ・ 支援の基本的考え方
- ・ 強度行動障害の状態
- ・ 行動障害が起きる理由

本題に入る前に・・・

- 強度行動障害支援者養成研修（以下、強行研修）
改定のポイント（2020年4月～）
- 強行研修（基礎研修）で学ぶこと

改定のポイント

- 継続点 1 カリキュラムを行動援護従業者養成研修と分けない
- 継続点 2 基礎・実践研修併せて24時間のプログラム
- 継続点 3 初心者でも理解できる内容（特に基礎研修）

- 変更点 1 カリキュラムの大項目ごとの時間配分※
- 変更点 2 カリキュラムの中・小項目※
- 変更点 3 ストーリー性を重視したプログラム構成

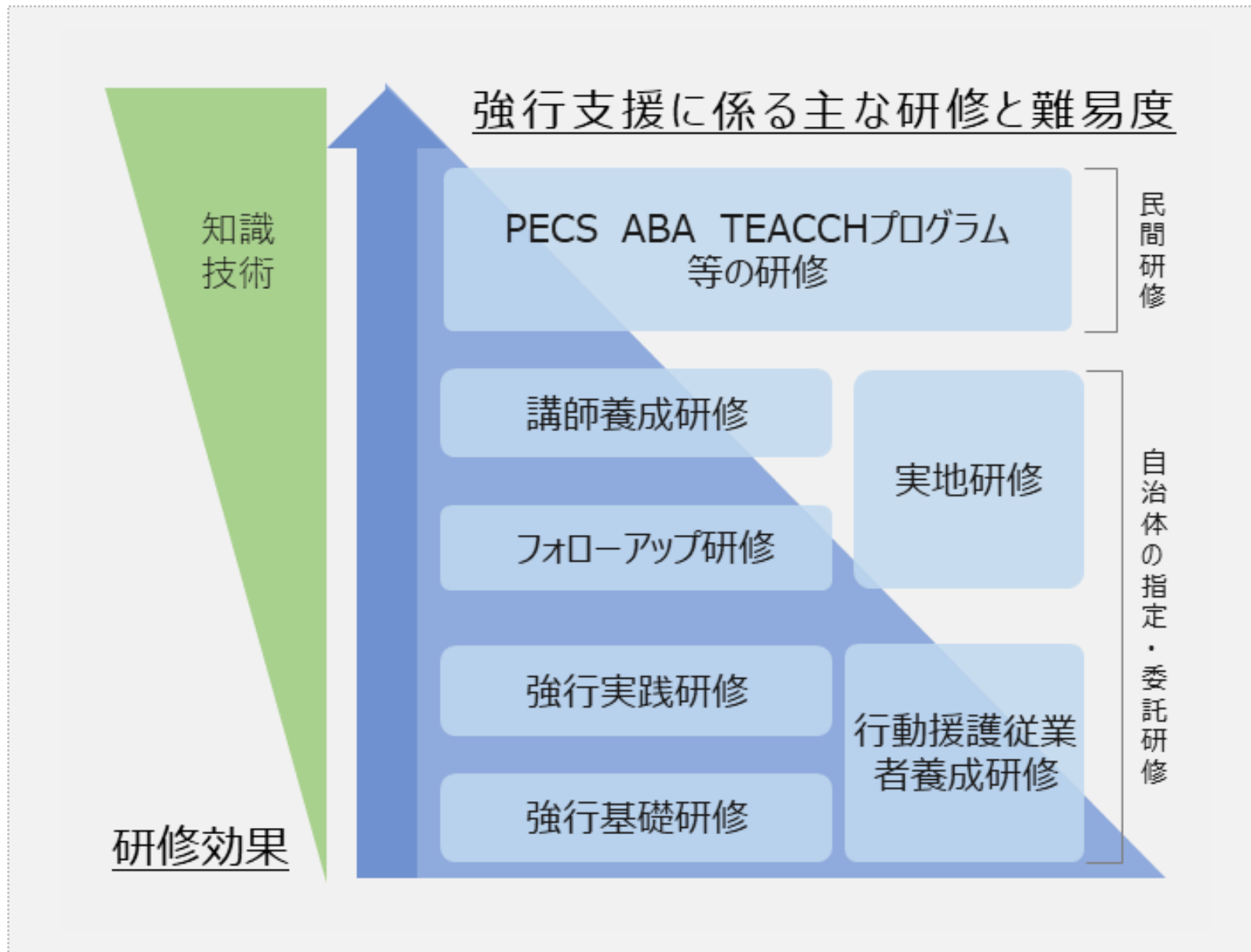


次ページスライド参照

研修のストーリー & 到達点

ストーリー	基礎研修	実践研修
Step 1	強度行動障害について基本的なことを知る	支援を組み立てるための基本的な流れの確認
Step 2	アセスメントに基づいた（情報を収集し、解決すべき課題を整理した上での）個別支援の大切さを理解する	アセスメントの具体的な方法を学ぶ
Step 3	支援の具体的な方法を知る	支援手順書の作成方法を学ぶ
Step 4	チームプレイの重要性を理解する	記録の方法と支援手順書の修正方法を学ぶ
Step 5	適切な支援を続けていくための知識を得る	組織として取り組むことの重要性を学ぶ
到達点	計画された支援の根拠を理解し、決められた手順通りに支援をすることができる。	チームの動きをイメージし、支援の手順を考え文章化する。 また、支援結果に合わせ、支援及び手順の修正をすることができる。

強度行動障害が現れている人への支援スキル 修得のためのステップで見る本研修の位置づけ



この時間で学ぶこと

- 強度行動障害の状態になぜなるのかを学びます。
そして、**予防**の重要性、**軽減**方法を学びます。
- 強度行動障害が軽減されることが最終目標ではなく、
強度行動障害という状態になっている人、
強度行動障害という状態になりやすい人が、
地域のなかで安心して幸せに生活すること
だということを確認します。

この時間の流れ

講義

 動画視聴

- ①支援の基本
- ②強度行動障害とは
- ③なぜ強度行動障害という状態になるのか
- ④児童期の予防の大切さ
- ⑤まとめ：強度行動障害と社会参加

①支援の基本

支援とは

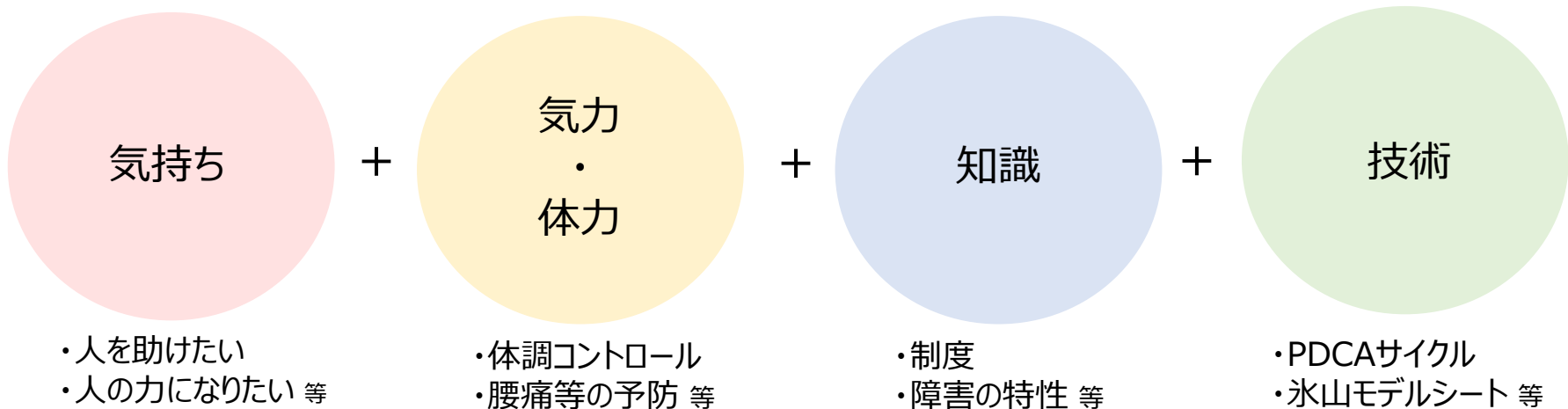
他人を支えたすけること

労力や金銭などの面で、その活動や事業を助ける意を表す



出典：三省堂大辞林第三版

支援の専門家が、支援を提供する際に必要なもの



基礎的な支援の流れ



よりよい支援の流れをつくるためのポイント



2 情報整理時、**ICF**を活用する



2 情報分析時、**氷山モデルシート**を活用する



チームで支援の手順を統一するために、**支援手順書を作成・共有**する



11項目におよぶ支援の流れは、大きく下記の4つに分けることができる。

- 1～6 = 計画 (Plan)
- 7・8 = 実践 (Do)
- 9・10 = 評価 (Check)
- 11 = 改善 (Action)

⇒これを「**PDCAサイクル**」といいます

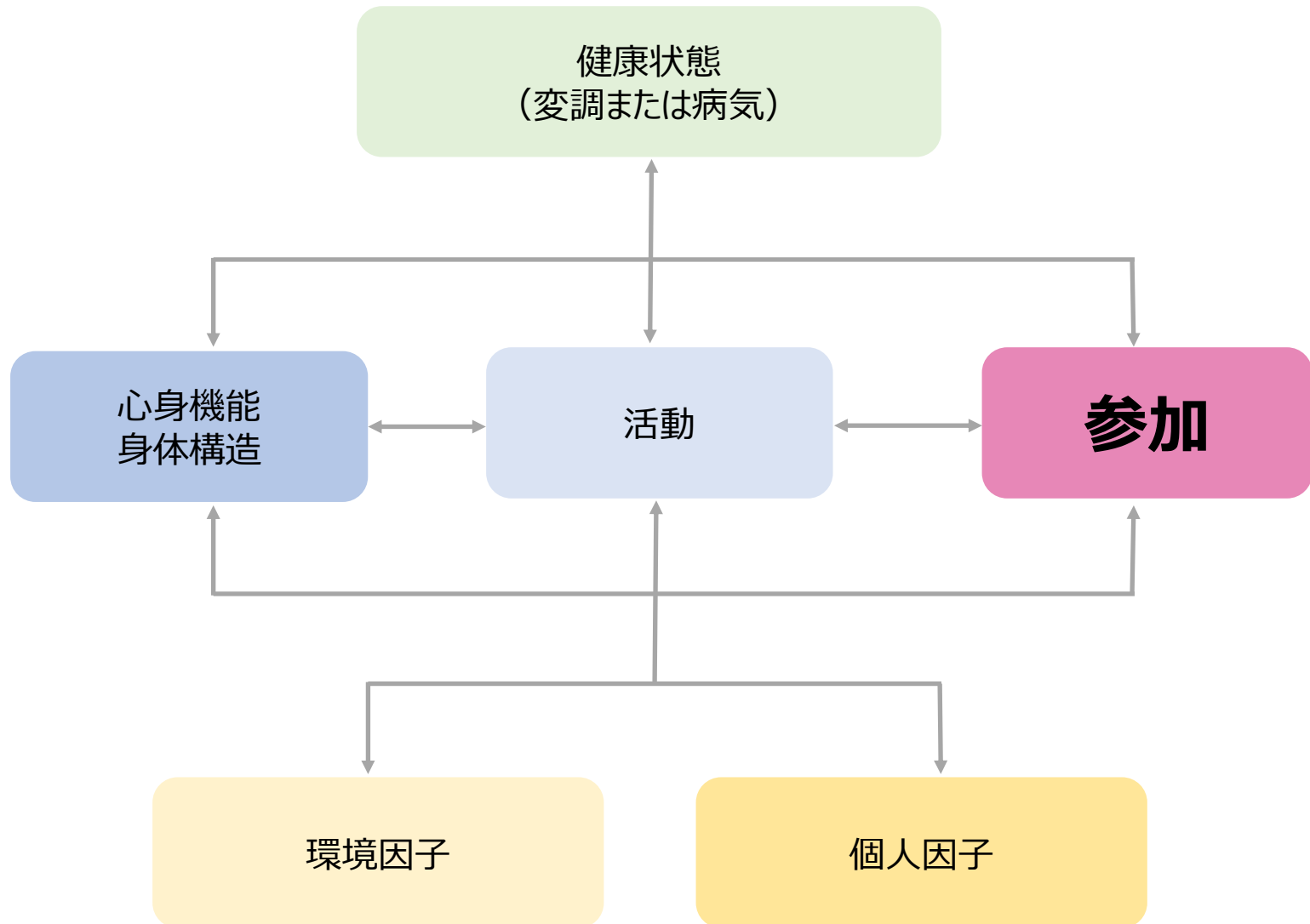
業務を継続的に改善していく手法。品質管理の国際基準であるISO9001や、ISO14001などにも考え方が採用されている。



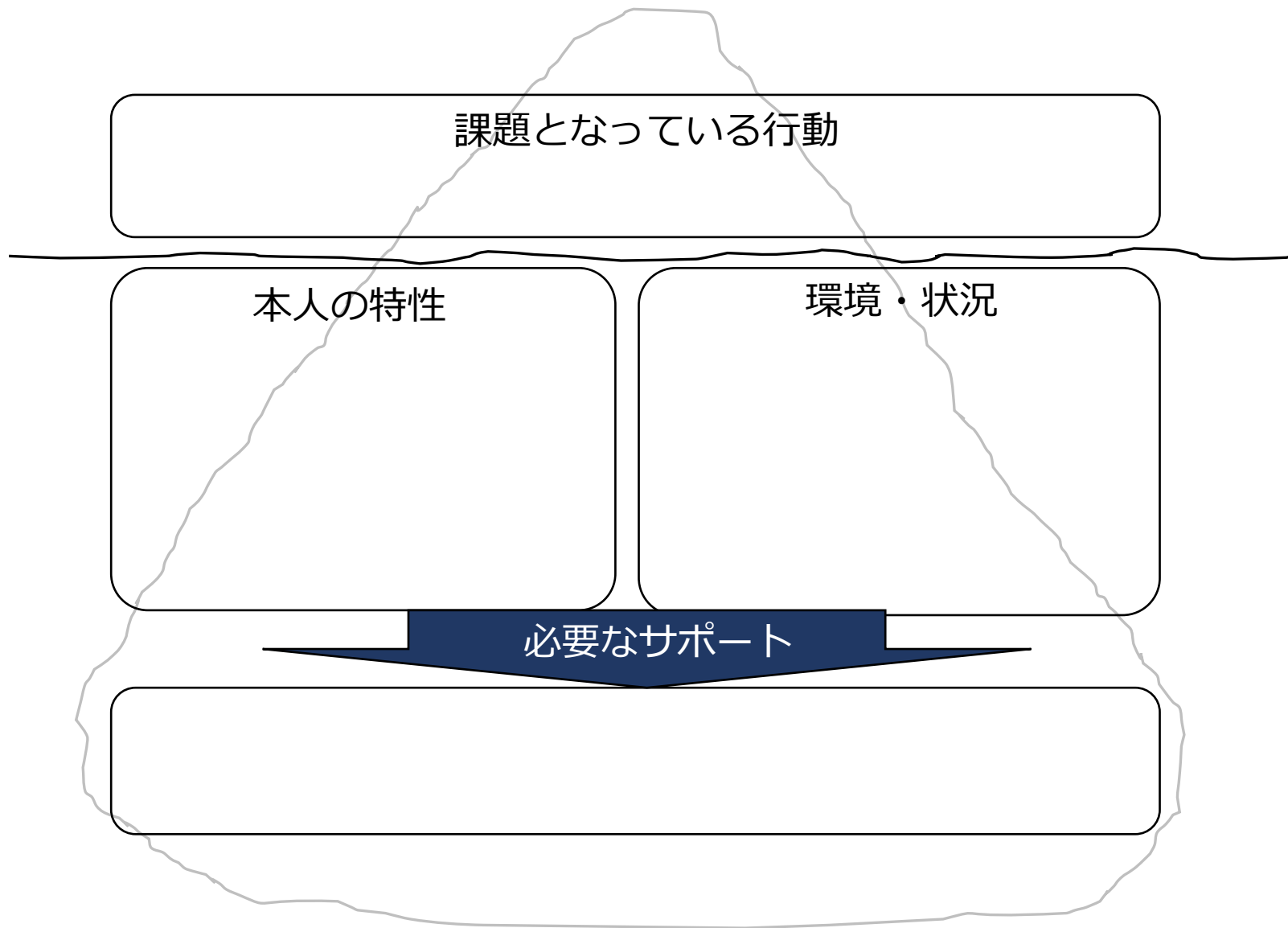
よりよい人生へと向かう

ICF（国際生活機能分類）とは

- ▶ International Classification of Functioning, Disability and Health 2001年5月 WHO総会で採択
- ▶ ■人間全体を見る ■個別性をとらえる ■サービスの効果を全体的にとらえる ものとして使われている



これが「冰山モデルシート」です



これが「支援手順書（例）」です

支援手順書/記録用紙

日付け	20〇〇年〇月×日	氏名	Tさん	記入者	支援員B
工程	本人の動き	支援者の動き・留意点		本人の様子(記録)	
事前準備		スケジュールに活動カードをセット。 お茶をカバンに入れる。			
スケジュール確認	出発前に支援者と一緒にスケジュール確認	Tさんに見えるようにスケジュールを示し、活動カードを1つ1つ指差しして予定を最後まで確認する。 最後まで確認できたらカバンを渡して出発するように促す。			
散歩	公園に向かって歩く	Tさんの横を歩き、通行人や車をぶつからない様に注意する。 ぶつかりそうな時はTさんの前に出てジェスチャーで止まる様に促す。 公園に近づくと走り出すことがあるので、横断歩道の前で本人の前に出て身体の前には手を出すジェスチャーで止まる様に促し、支援者が安全確認する。			
公園	公園の入り口でスケジュール確認 ブランコで遊ぶ お茶を飲む	公園の入り口でスケジュール確認(活動カードを外す)。 ブランコに移動、本人が満足するまで遊んでもらう。 満足して動き出したら、次のスケジュールを示しベンチに移動。 ベンチでスケジュール確認(活動カードを外す)、お茶を飲む。 終わったら次の活動を伝える。 * Tさんが水遊びを始めた時は、タイマーを3分にセットし、Tさんに見える様にセットし、「3分でおしまい」と声かけ。 タイマーがなったらTさんが水道を止めるので、次の活動を促す。			
外食	飲食店に行き食事をする	お店の前で走り出すことがあるので、本人の前に出てジェスチャーで止まってもらい支援者が安全確認。 店の前でスケジュール確認(活動カードを外す)。 メニュー表を見せると、食べたいものを指差すので、支援者が注文、購入する。 食事は見守りする。 食べ終わったら次の予定を伝える。			
帰宅	自宅に戻る	スケジュール確認(活動カードを外す)。 家族にTさんの様子を伝える。			

*** スケジュール確認の手順**

- ・スケジュールカードを指差し、次の活動を単語で伝える
- ・活動場所に着くとカードを外しポケットに入れる
- ・次の活動を伝える際はスケジュールカードを指差し、単語で伝える

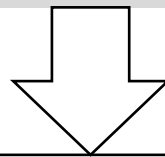
*** 本人と関わる際の注意点**

- ・声かけは最小限にする(声かけが多くなると混乱しやすいため)
- ・公園やお店の近くでは目的に向かって急に走り出すことあり
- ・事前にジェスチャーで止まる様に促し支援者が安全確認する

②強度行動障害とは

「強度行動障害」とは

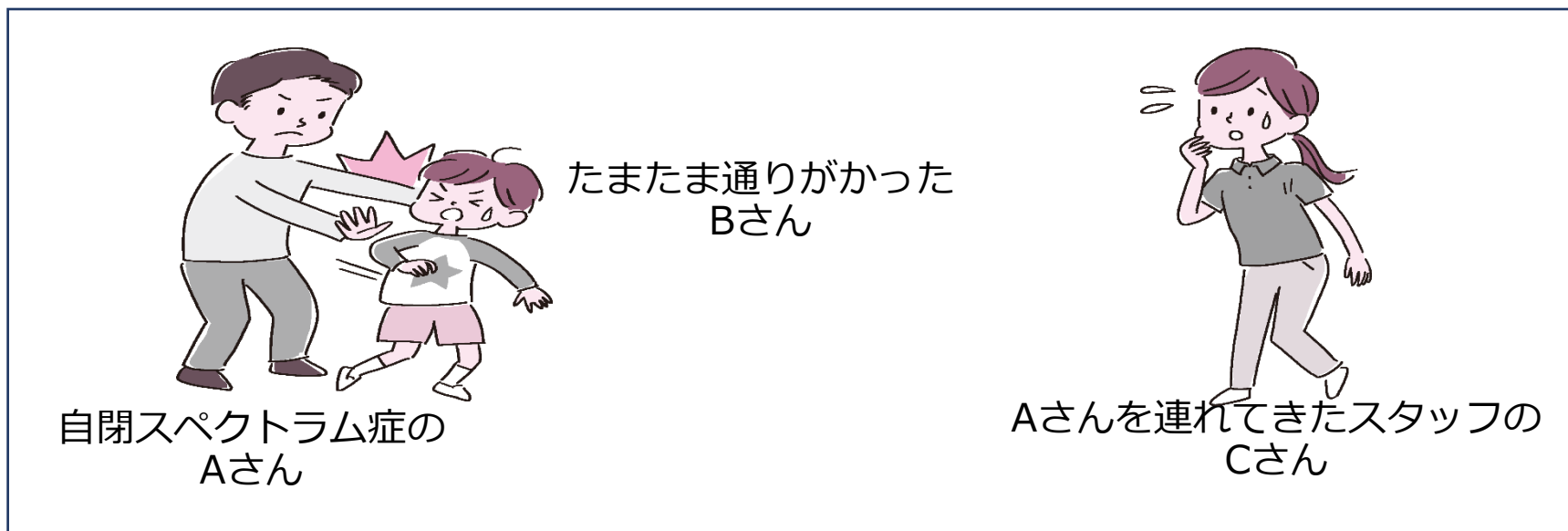
自傷、他傷、こだわり、ものの壊し、睡眠の乱れ、異食、多動など本人や周囲の人のくらしに影響を及ぼす行動が、著しく高い頻度で起こるため、特別に配慮された支援が必要になっている状態を意味する用語



- × もともとの障害
- その人の状態のこと

③なぜ強度行動障害という状態になるのか

- ・あるショッピングモールでの出来事です。
- ・放課後等デイサービスの活動の一環で、数人の子どもたちでお買い物体験に来ていたAさん。
- ・あるショッピングモールで、たまたま通りかかったBさんを押してしまいました。
- ・困っているのは誰でしょう？



一般的には、「わけのわからないまま押されてしまったBさん」
「Aさんを連れてきたCさん」

と答える人が多いかもしれません。

実は、Aさんも困っています。

なぜなら、ショッピングモールのようなうるさい環境が苦手なほか、
そういった環境にいつまでいなければいけないのか分からないからです。

「うるさくていやだよ～」

「いつまでここにいなければいけないの？」

「はやく帰りたいよ～」

障害により、こういった気持ちを言葉で
上手に伝えることができない

その困り具合を・・・

“目の前に通った子を押す”という行動で表現



だから答えは、「みんな」です

ということを、この研修の受講者には理解して欲しいのです。

Aさんのように、障害からくる苦手さを持つ人たちは、困っています。

障害からくる苦手さ

先の予測をすることが難しい

見えないものの理解が難しい

話し言葉の理解が難しい

抽象的であいまいな表現の理解が難しい

話し言葉で伝えることが難しい

やりとりの量が多いと処理が難しい

少しの違いで大きな不安を感じる

聴覚の過敏や鈍麻がある

⋮



不安

緊張



不安や緊張から

逃れたい

不安や緊張を

伝えたい

不安や緊張に

気づいてほしい

でも方法がわからない



気持ちを **行動** で表す



- そのまま、障害からくる苦手さが解消されないと、さらに、激しい行動をとることがあります。



- また、適切な行動を教えてもらう機会がなかったり
- 自分の気持ちを伝えるために激しい行動を取った時、周囲がその行動を止めるために本人が望むままの対応を繰り返していると、「激しい行動をすることで自分の気持ちが伝わる」と理解し、激しい行動が定着してしまうこともあります。

このように、

- ☑ 適切な行動を教えられていない
- ☑ 周囲が誤った対応を繰り返す



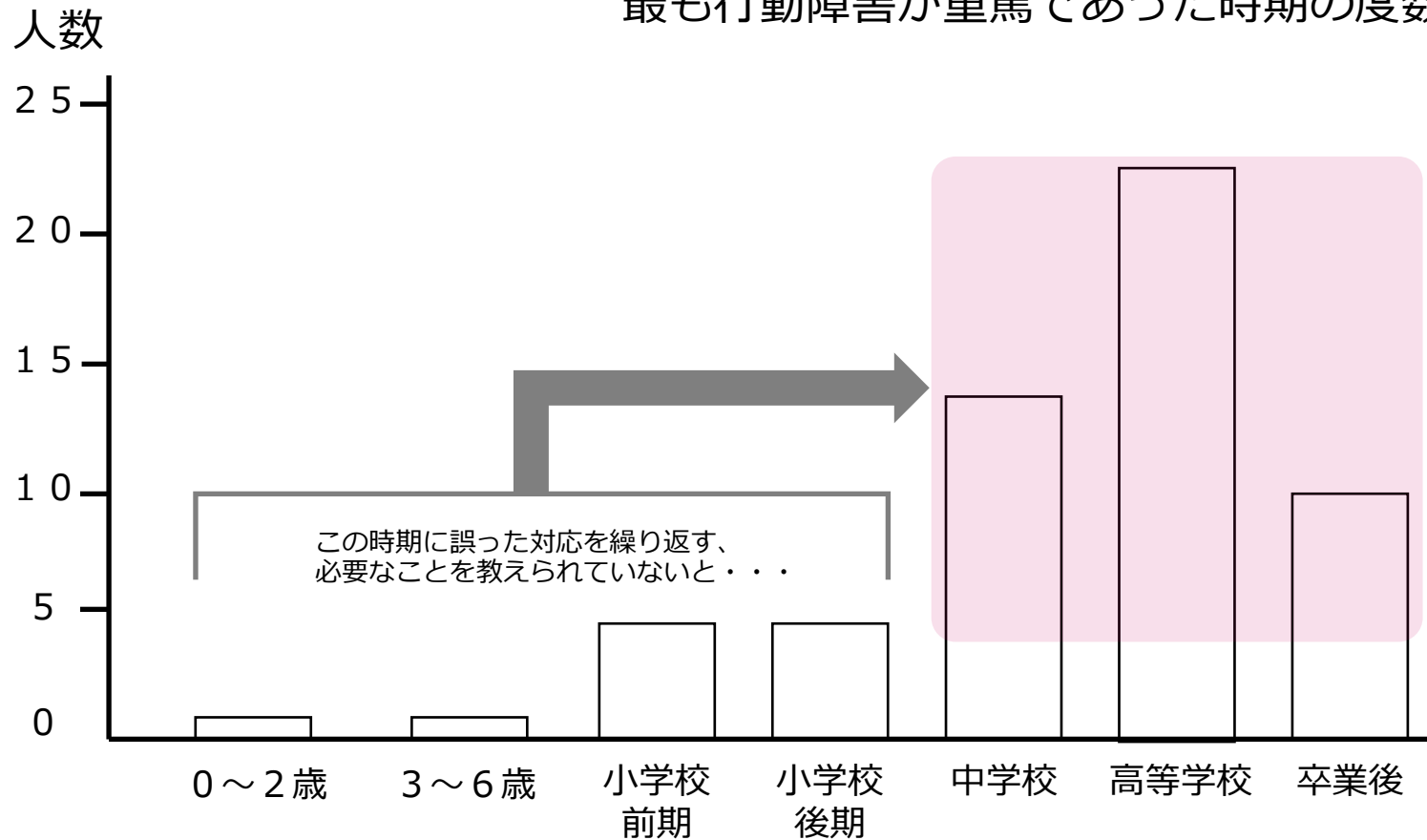
行動が激しくなっていく

= 「強度行動障害の状態」

といいます。

④児童期の予防の大切さ

最も行動障害が重篤であった時期の度数分布



厚生労働省平成24年度障害者総合福祉推進事業「強度行動障害の評価基準等に関する調査について」報告書
社会福祉法人全日本手をつなぐ育成会

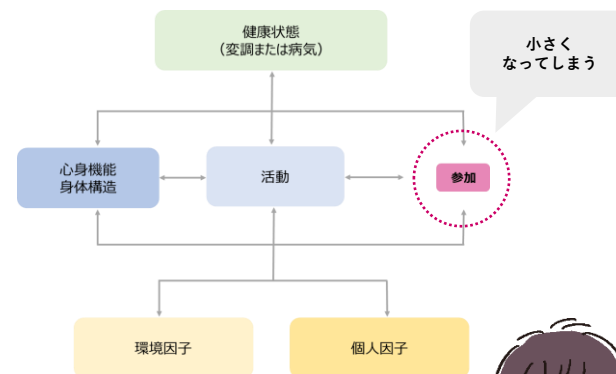
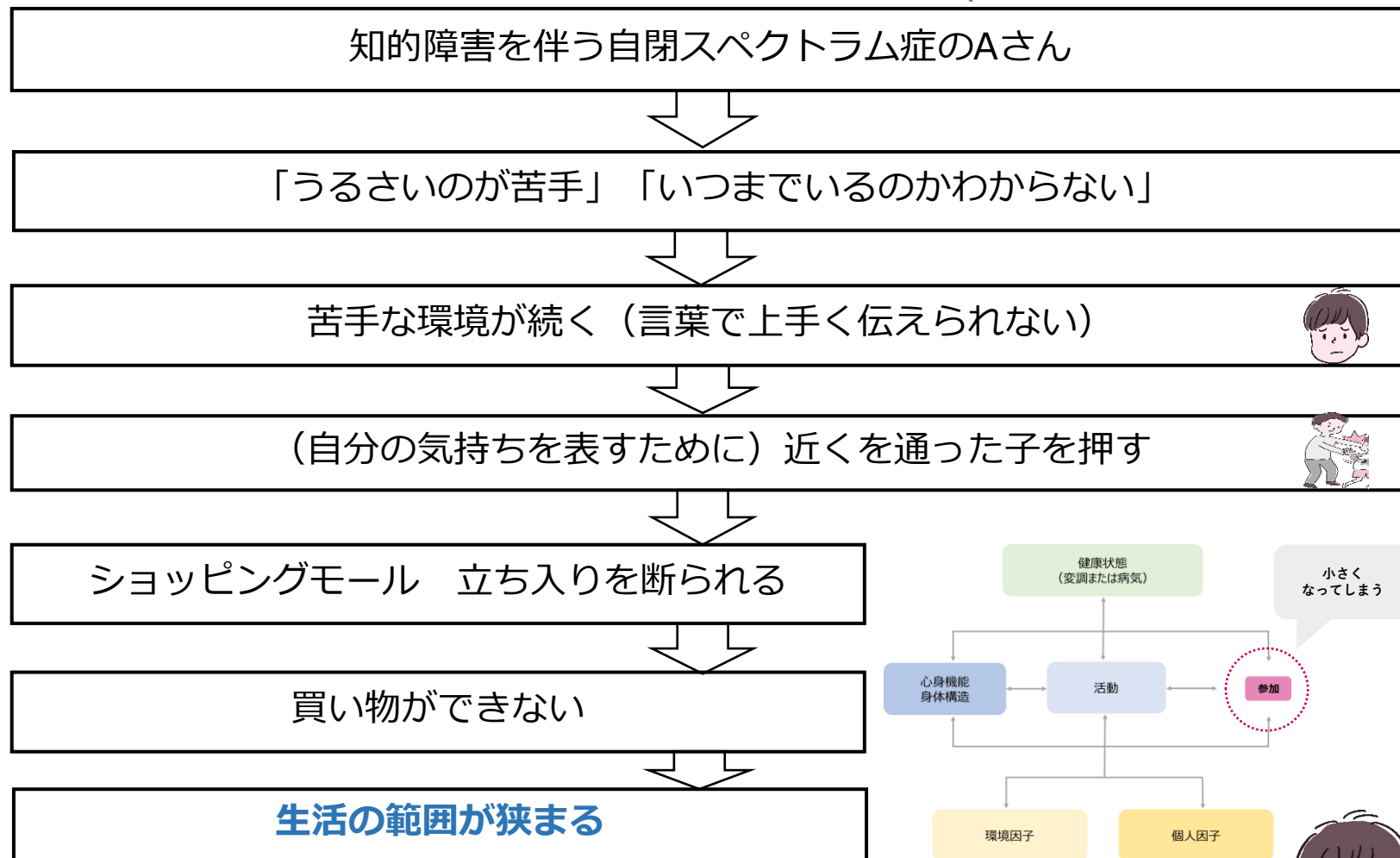
だから、幼児期・児童期の適切な関わり（例えば、本人に合った学び方でコミュニケーション方法を身につけることなど）が重要

⑤まとめ：強度行動障害と社会参加

—誰もが幸せに生きていくことができる社会に—

▶適切な支援がない場合

先ほどのAさんの事例で考えてみましょう



事業所から利用を断られることも……。そして、より行き場のない生活へ



▶適切な支援がある場合

知的障害を伴う自閉スペクトラム症のAさん

本人の特性に合わせ、騒がしくない時間帯にお店に行く
いつまでお店にいるか本人にわかるように伝える。

「合理的配慮」といいます

「分かる」「快適」

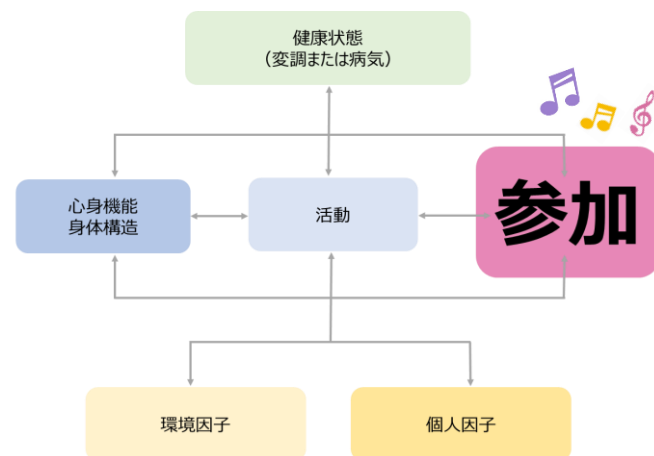
「充実」「安心」



・外出を楽しむ ・違うお店でも買い物ができる

社会参加が進む

地域の中で安心して幸せな生活ができる



強度行動障害の状態になっている人は、
「**困った人（子）**」ではなく「**困っている人（子）**」
＝合理的配慮が必要な人

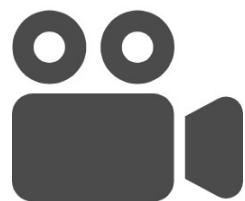
私たち支援者は、
私たちの理解や配慮によって

- ☑強度行動障害の状態にならないよう**予防**することができる
- ☑既に現れている強度行動障害を**軽減**できる

そして

- ☑彼らの**社会参加**を進めることができる

ということを認識することが大切



動画を視聴します

過去に、強度行動障害の状態になったことのある鈴木さん（仮名）のお話



最終目標

強度行動障害という状態になっている人・なりやすい人が
地域の中で 安心して 幸せに 生活すること